國學院大學学術情報リポジトリ

Anthropological Exhibition and Museological Ideology of Syogoro Tsuboi toward the End of Maiji Period

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: Shimoda, Karin
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000251

明治末期における坪井正五郎の人類学展示と博物館構想

下田夏鈴

はじめに

十九世紀における欧米諸国では、帝国意識の拡大に伴い、各国が植民地政策に力を注いでいた。同時期に出現した万国博覧会では、自国の強大さを誇示するための植民地展示が行われ、その規模は、回を重ねるごとに盛大さを増していく。

植民地展示には、その土地の人種、文化に精通する専門家の協力が必要であった。そこで協力したのが、人類学者である。人類学もまた、一八五九年にパリで世界初の人類学会が創設されたことにより、本格的な研究が始まっていく。植民地の拡大は、人類学者に研究対象の増加と学問の発展をもたらし、博覧会の植民地展示は、研究成果の発表の場となった。植民地政策・博覧会・人類学は、共に隆盛を極めることとなるのである。

この一連の流れは、日本においても同様であった。一八九五年、日清戦争勝利によって初めて植民地を獲得した日本は、一九〇三年の第五回内国勧業博覧会において、国内初の植民地パビリオンである台湾館を設置する。また、民間パビリオンとして設置された学術人類館は、生身の人間を展示する「人種の展示」を行ったパビリオンであり、当時から批判の対象となっ

た。この学術人類館において展示協力を行ったのは、人類学者坪井正五郎である。

この時期における坪井の活動は、世紀転換期の他者表象をめぐる研究において取り上げられている。松田京子の『帝国の視線』では、博覧会を中心に異文化表象に関する考察を試みている。松田は、世紀転換期における「他者」表象を支えた知的枠組みとして人類学が存在していたとし、坪井の人類学・人種観念・東京帝国大学人類学教室標本展覧会における展示の実践を例として取り上げている。坪井の人類学展示は、ある同一性を持った集団を措定し序列化するという思考と結びつく形で実践に移されたものであると結論づけている。[1]

伊藤真実子の『明治日本と万国博覧会』では、坪井が助力した第五回内国博覧会の余興パビリオンである学術人類館を「植民地館」であると位置づけ、「人種の展示」に対する抗議批判と学術人類館側の対応について詳細に記している。[2]

阿部純一郎の『〈移動〉と〈比較〉の日本帝国史―統治技術としての観光・博覧会・フィールドワーク―』では、「人種の展示」は、人類学者が植民地展示の生活や文化に直接触れることのできる貴重な出会いの場を構成したものであるとしている。しかし、その出会いは「吾々＝日本人」が研究し、豊かになるために存在したものであると評価された、と結論づけている。[3]

いずれの先行研究においても、当該期における人類学は、帝国意識の強化を助長した学問として捉えられており、人類学の第一人者であった坪井の評価は、決して高いとは言えない。

一方で、坪井の人類学展示とその方法論は、博物館学的見地から評価されている。邉見端や青木豊は、坪井の博物館学的業績を紹介し、「明治期に於ける博物館学萌芽期の先駆者」であると称している。[4]

しかし、博物館学における坪井の評価には、史学的見地がやや欠如しているように思えてならない。当時の歴史的背景を考慮した上で、坪井が如何なる意図で論を展開し、人類学展示を実施したのか。これを明らかにすることが必要であると筆者は考えるのである。

本稿は、坪井の人類学研究の主旨を整理した上で、坪井の人類学展示と博物館構想に関する考察を試みるものである。なお、現在の社会的規範では不適切な表現があるが、歴史資料の引用として原文のまま記載した。また、「人種の展示」に関しては、先行研究等において「原住民展示」「人間展示」「民族展示」など様々な名称で呼ばれているが、本稿では「人種の展示」と表

記することとする。

一、坪井の人類学

(一) 目的と研究範囲

まず、坪井の人類学について簡単に整理しておきたい。坪井は、人類学の目的として次三点を挙げている。[5]

我々人類は何で有るかと云ふ事
我々人類は現今如何なる有様で存在して居るかと云ふ事
我々人類の今日有る所以如何と云ふ事

坪井は、それぞれ人類本質論・人類現状論・人類由来論と名称を付けており、これらを明らかにする学問こそが人類学であるとしている。

では、それを明らかにするためにはどのような研究を行うのか。今日の人類学は、人類の形質・文化・社会の多様性と普遍性を、さまざまな側面から総合的・実証的に明らかにする学問であると位置付けられている。形質面の研究を主とする形質人類学と文化や社会生活面から接近する文化人類学・社会人類学とに大きく分けられる。具体的に人類学資料とは、古人類が使用した石器などの道具を含める自然人類学資料と、民族誌などの文化人類学資料がある。

今日の人類学の定義に対し、坪井の人類学は、広範な学域を有していた。一八八六年に発行された『人類学会報告』第2号に掲載された「研究項目」には、人類学の学術範囲が以下の通り記されている。[6]

人類ノ解剖、人類ノ生理、人類ノ發育、人類ノ遺伝、人類ノ變遷、人類ト近似動物トノ比較、人類ト絶種動物ノ關係、人類ト稱ス可キモノノ顕レシ時、人類ト稱ス可キモノノ顕レシ地、人類住居ノ變遷、貝塚、土器塚、土器石器青銅器、穴居、横穴、塚穴、原始墳墓、文字ノ歴史、言語ノ血統、國語ノ性質、方言、俚歌童謡、家族組織、部落組織、原始學術、原始宗教、原始工芸、原始運搬法（舟車ノ類）、原始漁勞、原始商業、原始農業、衣食住沿革、装飾、風俗習慣、器具沿革、人類ノ區別、人種ノ移住、人種ノ頒布、其他是ニ類スル事件

坪井は、動物学・考古学・歴史学・民俗学など、多くの学問を人類学の範囲と捉えていたのである。

また、考古学や民俗学などは、当時の日本において独立した

学問ではなく、人類学の中に組み込まれていた。考古学が日本で認識され始めるのは、エドワード・シルヴェスタ・モースによる大森貝塚の発見や、柴田承桂による『古物学』の翻訳本が刊行された以降のことである。[7] その後、考古学は、坪井の活躍とともに独立した学問として発達していくこととなる。人類学研究において多様な分野を対象としていたことより、むしろ、その中から日本考古学を確立させたことが坪井の功績の一つである。[8]

坪井が本格的に人類学研究を始めたのは、一八八六年のことである。この年、東京帝国大学を卒業した坪井は、人類学研究のために大学院に進学する。一八八九年には、官費留学生として三年間を英仏両国で過ごした。坪井は、留学先で大学に属することもしなければ、特定の学者に師事することもしなかった。大英博物館をはじめ多くの博物館に通い、様々な分野を専門とする人物たちと交流をした。パリ滞在中には、開催中のパリ万国博覧会を訪れ、人類学部の展示品や展示方法について詳細な記録を残している。

西欧の人類学を見聞した坪井は、一八九四年「人類學と近似諸學との區別」と題する論文を発表する。その冒頭では、次のように述べている。[9]

> 我邦に於ては追々に人類學は盛大に成る傾向がござりますが世間には往々人類學の眞相を思ひ誤つて此一個獨立の專門學をば他の學問に附屬するものと考へ或は他の學問と混同して居る人がござりますから諸君が斯かる人の惑ひを解かるる時の御參考にも成れかしとて此所に「人類學と近似諸學との區別」と云ふ題を掲げ一場のお話しを致します。

この文面から、当時の日本では、人類学が一般に認知されていなかったことが伺える。坪井は、この論文において考古学、史学、医学、解剖学、社会学、比較宗教学、動物学、地質学など、人類学と混同されやすい又は関係性の深い学問との違いを説明することで、人類学の大意を一般に明示しようとしていたのである。

(二)　人種問題

坪井は、人類学研究の中でも人種問題を重要視していた。一八九五年に「人種問題研究の準備」と題する論説を発表しており、次のように述べている。[10]

殊に日清戰争や條約改正の直接或は間接の結果として諸外國人との交際益々頻繁と成るに違ひござりませんから、今後は尚更人種問題と云ふ事が我が邦人の腦裡に浮かんで來るでござりませう。

人種問題は、戦争や外交による諸外国との接触、人種の異同に付随して生じるものであり、今後日本においても重要な問題となることを坪井は指摘している。また、主要な人種問題としては、五つの問題があると述べている。[11]

（第一）人種の異同に隨つての法律制度上諸種の權利の異同。
（第二）人種の異同に因りて生ずる團結力の強弱。
（第三）異人種相互の感情の好悪。
（第四）異人種男女配偶結果の好否。
（第五）異人種の雑居より生ずる諸事の利害。

そもそも、坪井が人種を重要視した理由は何なのか。それは、黄禍論への反発である。坪井は「自分と違ふ者は劣等等と云ふのは世間を知らないことを自白表明するやうなものであります。（中略）黄禍などと云つて、日本人は黄色いから他の黄色い者と團結するだらうなどと云つてビクビクするのは間違いである」と述べており、黄禍論に反論している。[12]

宮武公夫は、セントルイス万国博覧会や日英博覧会当を通じて、西洋人がアイヌ民族の肌の色に注目して「白人性」を発見しようとしているのに対し、坪井をはじめとする日本人の多くは、アイヌの肌の色や「白人性」について沈黙しているのが特徴的であると述べている。[13]その理由を一概に説明することはできない。坪井に関して述べるとすれば、白人の優等を前提とした人種観念の中で取り上げられる「肌の色」は、坪井にとって人種を考える上で然程重要な要素ではなかったと考えられる。また、坪井は「或る性質を通じ有する人類の團躰」と人種を定義しており、その範囲は、研究者や研究内容によって異なるものであると説明している。[14]

㈢　戦争と人類学

坪井は、官費留学から帰国した後、東京帝国大学理科大学の教授となり、今まで以上に人類学研究の発展に尽力していく。また、一般への人類学普及のために多くの論考を発表するようになる。

坪井が国内において積極的な活動を見せ始めたちょうどその

頃、日清戦争が開戦する。一八九四年、朝鮮南部を中心に全土に広がりを見せた甲午農民戦争が起こり、この戦争の鎮圧を名目とし、日清両国が朝鮮へ出兵。同年八月に宣戦布告し、日清戦争が開戦した。日本は平壌・黄海・旅順などで勝利を収め、一八九五年に下関条約を締結。条約の内容は、清国は朝鮮の独立を確認し、2億両（テール）を賠償、遼東半島・台湾・澎湖諸島を割譲、沙市・重慶・蘇州・杭州を交易市場とすることなどが盛り込まれていた（ただし遼東半島は、三国干渉により還付）。この戦争の結果、日本は、対外戦争による初めての植民地を獲得することとなったのである。

植民地の獲得により、日本は、版図内に新たな民族、台湾民族を加えることとなった。さらに、日露戦争後のポーツマス条約では、韓国における権益の確認、関東州の租借権、樺太南半割譲を得、オロッコ（ウィルタ）、ギリヤーク（ニヴフ）、朝鮮民族が版図内に加わることとなった。このように、戦争は、領土の拡大だけではなく、日本国民の追加をもたらしたのである。

人類学者である坪井にとっても、戦争は大きな出来事であった。坪井は、「戰争の人類學的觀察」と題する論考において次のように述べている。[15]

> 社會の組織、種族の団結、異種族の親疎、雑種の発生、住所の移転、言語風俗の変化、種族の盛衰或は絶滅といふ様な事柄も其結果として常に現れ來つて居た訳であります、今後も同様でありませう、して見ると戰争といふ事は人類研究の上から大に注意すべきものであります。

社会や種族に変化・影響を及ぼす戦争は、人類学研究上注目すべき事象であった。日清戦争と日露戦争は、種族の団結、種族の移転等を実際に坪井に体験させることとなったのである。坪井は、対外戦争による領土拡大も含め、異なる民族が日本国民に加わったことが、明治年代中最も重要な出来事であると述べている。その理由は、人類学の研究対象となる人種・民族が身近な存在となったためである。これは、決して坪井に限ったことではなく、当時の人類学者のほとんどが同じ考えを持っていたと思われる。

小結

坪井の人類学は、広域な研究分野を有していた。そのため、博物学的、好事家的学問であると評されることもある。[16] しかし、

自身の人類学研究の目的を明確に持っており、他の学問との区別も述べていることから、坪井の人類学はむしろ専門的学問であったと筆者は捉えている。

坪井が本格的な人類学研究を始めた時期、日本の情勢は、日清・日露戦争によって大きく変化をしていた。坪井は、当時の日本を取り巻く状況により生じる人類学的問題に、率先して取り組んでいったのである。

二、博覧会における人類学展示

㈠　万国博覧会における人類学展示と「人種の展示」

坪井をはじめ、当時の日本人が影響を受けた万国博覧会の人類学展示と「人種の展示」に関して見ていきたい。万国博覧会の歴史は、一八五一年に開催されたロンドン万国博覧会から始まる。正式名称は、「The Great Exhibition of the Works of Industry of All Nations」といい、封筒製造機、輪転機、機関車等の機械産業を中心とした展示が行われた。

ジョセフ・パクストン設計のクリスタル・パレス（水晶宮）がこの万国博覧会の象徴的建造物であるが、このクリスタル・パレスにおいて、インド、カナダ、オーストラリアなどをはじめとする大英帝国の植民地展示が行われていた。展示品は、植民地が産出する原材料や生産物が主であった。万国博覧会は、開催当初から「帝国」としての国力を誇示する場でもあったのである。[17]

その後、欧米諸国は、競い合うように万国博覧会を開催するようになる。フランス革命一〇〇年を記念して、一八八九年に開催されたパリ万国博覧会では、植民地の風俗を再現したパビリオンが設置され、大規模な植民地展示が行われた。

人類学部門の展示に関しては、パリに留学中であった坪井が「パリー通信」に詳細を記している。それによれば、フランスにおける人類学上重要な人物や出来事に関する説明が掲げられていたほか、人類と動物の骨格標本、解剖模型など自然人類学に関する資料や、罪人の写真、顔模型といった犯罪人類学に関する資料等が展示されていたようである。また、アメリカ土人や日本アイヌ、江戸人など各人種の活人形も展示されていた。しかし、中には「一丈二三尺の日本製金色木質の大佛の座像」のように「人類學には縁の遠い品物」も展示されていたようである。[18] 坪井は、この人類学展示の展示方法に関して痛烈な批判を述べてはいるが、その展示品の数や規模には感心を持っていたようである。また、この博覧会では、未開人民の「人種の展

示」が行われ、万国博覧会における「人種の展示」の濫觴とされている。[19]

一八八九年のパリ万国博覧会以来、「人種の展示」は、主に植民地展示の一つとして行われるようになり、その規模を拡大していった。一八九三年に開催されたシカゴ万国博覧会では、非西洋人の展示が本格的に行われた米国で最初の例とされている。展示の責任者は、人類学者フレデリック・ワード・パットナムが担当した。[20]

一九〇四年に開催されたセントルイス万国博覧会では、人類学部門による「人種の展示」が行われている。『聖路易萬國博覽會本邦賛同事務報告』に掲載されている「出品部類目録」の第十三区人類学第一二八部叙述人類学の項には、次のように記されている。[21]

原人ヨリ現時ニ至ルマテノ人種及國民―各種ノ時代ニ於ケル種種ノ國民カ特殊ノ外情ノ下ニ達シタル文化ノ程度ヲ標本集合畫及寫眞ヲ以テ示ス所ノ族的及種的陳列品―現存人民ノ家族、集合體及種族

このように、セントルイス万国博覧会では、「人種」や「種族」が「展示品」として明記されていたのである。

万国博覧会では、人類学部門と植民地部門の両方において人類学者が展示に携わっていた。植民地展示として出現した「人種の展示」は、次第に人類学展示でも用いられるようになり、セントルイス万国博覧会において学問的性格を有する展示として位置づけられたのである。

坪井は、「人種の展示」をどのように捉えていたのか。坪井は、一八八九年のパリ万国博覧会で実際に「人種の展示」を目にしており、先に取り上げた「パリー通信」の中で「人種の展示」を「博覽會場中人類學上熟覽の価直（ママ）有る場所」の一つとして紹介している。[22]また、未開人民の研究について、坪井は次のように述べている。[23]

人類學上古物遺跡研究の目的は人類は發達上如何なる境遇を經過するものなりやとの事と人類は如何に分布されたのかとの事を考定するに有るのです。斯かる研究には現存の未開野蠻人民に關する智識が必要で有る。

この文面からは、坪井が文化進化論的考えから、未開人民を人類学上重要な研究対象としていることが読み取れる。「人種

の展示」は、坪井が人類学研究上必要な学術情報を得ることができる、重要な展示だったのである。

(二) 第五回内国勧業博覧会における人類学展示

内国勧業博覧会は、内務卿大久保利通の建議により殖産興業政策の一環として企画開催された、政府管轄の博覧会である。一八七七年、東京の上野公園で第一回内国勧業博覧会が開催される。その後、第二回、第三回を同地で、第四回を京都で、第五回を大阪で開催した[24]。出品物は、工業・冶金、製造物、美術、機械、農業、園芸の6区に分類されており、全国各地から収集された[25]。

内国勧業博覧会は、その名の通り国内の殖産興業を目的としており、出品物も国内の物に限定されていた[26]。しかし、第三回では参考館が設置され、一九〇〇年のパリ万国博覧会で購入した外国の製品が展示紹介された。さらに、第五回では、カナダ館やホーン館（アメリカ）などの外国政府又は企業パビリオンが設置されたほか、台湾の物産を展示する台湾館、「人種の展示」を実施した民間パビリオンである学術人類館など、万国博覧会に共通する施設が設置されるのである。

このように、第四回までの内国勧業博覧会は、殖産興業政策の一環として存在した経済博覧会であったのに対し、第五回内国勧業博覧会は、国家の威信を内外に示すための博覧会であったと捉えられている[27]。

第五回内国勧業博覧会は、一九〇三年に大阪市南区天王寺今宮において三月一日から七月三十一日まで開催された。工業館、大阪砲兵工廠、教育館、農業館、林業館、動物館、参考館、台湾館等が設置され、入場者数は四，三五〇，六九三人と、過去最大の入場者数を記録した[28]。

坪井は、第五回内国勧業博覧会における人類学上利益のある施設として、参考館、台湾館、学術人類館を挙げている。以下、本博覧会において初めて設置された台湾館と学術人類館に関して説明したいと思う。

1．台湾館

台湾館は、内国勧業博覧会で初めて設置された植民地の展示施設である。台湾総督府が、台湾に関する実情を国内に示すことを目的として設置を要求し、一九〇二年十月十四日農商務省告示第一八五号で台湾館の設置が追加された[29]。

坪井は、台湾館の様子に関して次のように記している[30]。

正面の美術館に付いて左の方へ曲がると右の突き當たりに支那風の建築が見える。是が評判の高い臺灣館で有ります。建て物夫れ自身が既に臺灣家屋の標本で有りますが、館内に入れば臺灣の住民及び其風俗に關する種々の智識が得られます。（中略）中庭へ出て右へ曲がると隅の所に臺灣料理の店が有つて此所の給仕女に二人の土人が居る。左へ曲がると賣店が有り、行き止まりに臺灣喫茶店が有つて此所にも土人の女が居る。中庭の中央には奏樂堂が有り、其所に美事な轎が据へて有る。門の所迄戻つて篤慶堂と反對の方に入つて見ると此所には生蕃の容貌を示す寫眞、風俗を示す諸標本が有つて、各の解説を讀みながら是等を熟視すれば生蕃に關する事は精く知る事が出来ます。右の方は總て臺灣物産の陳列所では有りますが、此所にも住民の生活狀態を示す物が澤山有ります。列品の番人には土人が用ゐて有りますから、是れ亦見逃すべからざるもので有ります。

坪井が人類学上利益のある施設として台湾館を挙げた最大の理由は、台湾の建造物、物品、そして民族が、一つの場に集約されていたためである。それは、台湾館に足を踏み入れた途端、来館者にあたかも台湾にいるような気分を与える装置となったのである。坪井は、日本国内にいながらも、台湾に関する豊富な知識を得ることができる施設として台湾館を評価していたのである。

2．学術人類館

第五回内国勧業博覧会では、集客力の向上のために余興パビリオンが設置された。世界各国の風景をパノラマで体感できる世界一周館、米国女優カーマン・セラによる電気舞が話題となった不思議館を始め、動物園、回快機（メリーゴーランド）、ウォーターシュートなど、娯楽的性格の強い施設が設置されていた。[31] その余興パビリオンのひとつとして設置されたのが、学術人類館である。

学術人類館とは、民間主催の余興パビリオンであり、実際に「人種の展示」が行われていた施設である。坪井は、このパビリオンへの展示協力を依頼され、土俗品と「世界人種地圖」を貸与している。学術人類館の趣意は、次の通りである。[32]

第五回内國勸業博覽會の餘興として各國異種の人類を招聘聚集して其生息の階級、程度、人情、風俗、等各固有の狀躰を示すは人類生息に付學術上、商業上、工業上の參考に

於て最も有要なるものにして博覧會に缺く可らさる設備なる可し然して文明各國の博覧會を鑒察するに人類館の設備あらざるはなし之れ至當の事と信す然るに今回の博覧會は萬國大博覧會之準備會とも稱す可き我國未曾有の博覧會なるにも拘らす公私共に人類館の設備を缺くは吾輩等の甚た遺憾とする所なり爰に於て有志の者相謀り内地に最近の異種人即ち北海道アイヌ、臺灣の生蕃、琉球、朝鮮、支那、印度、爪哇、等の七種の土人を傭聘し其の最も固有なる生息の階級、程度、人情、風俗、等を示すことを目的とし各國の異なる住居所の模形、装束、器具、動作、遊藝、人類、等を觀覧せしむる所以なり

学術人類館は、学術上、商業上、工業上の参考となる諸人種の展示を目的とした施設であることがこの趣意書には明記されている。娯楽的性格の強い余興パビリオンの中で、学術人類館が文面上特別な性格を有していたことがわかるだろう。展示協力を依頼された坪井も、「何卒單に見せ物視せず學事上の參考に供する考へを以て之を見る人の多い様に致し度いもので有ります」と述べている。[33]

学術人類館は、博覧会表門の正面に設置されており、敷地三〇〇坪未満の建物の中で諸民族の写真、土俗品、標本などを展示すると同時に、実際に複数の民族を住まわせ、時には歌舞音曲の演奏が行われていた。[27] 展示されていた民族は、「アイヌ七名（内女二名）琉球人二名（女）生蕃タイヤル種族一名（女）熟蕃二名（男）臺灣土人二名（男女）マレー人二名（男）ジヤヴァ人一名（男）印度人七名（内女二名）トルコ人一名（男）ザンヂバル島人一名（男）」であった。[34]

「人種の展示」に関しては、坪井が関与していたことを示す史料は見つかっていない。資料の貸与以外に、坪井が学術人類館の展示にどの程度協力をしていたのか、はっきりとはわかっていないのである。しかし、坪井がパリ万国博覧会の「人種の展示」に関心があったこと、未開人の研究が人類学上必要であると認識していたことを踏まえれば、坪井が学術人類館の展示に協力的姿勢を見せていたことは間違いないであろう。

坪井が貸与した「世界人種地圖」について触れておこう。「世界人種地圖」は、坪井が提案し、大野雲外が作成したものである。大野は、洋画家本多錦吉郎のもとで絵を学び、出版社金港堂に勤めた人物である。その後、一八九二年から人類学教室で教室用の図画制作を委託されるようになり、一八九五年には画工として採用された。作成された地図は「縦一間半、横二間半

の世界圖を四十五度の傾斜の板に張り、丈六七寸の諸種族着色切り抜き人形を作つて、各々其の棲息地の位置に鉛直に取り付けたもの」で「人形の傍には番號を書き添へて種族名對照の便に供し」たものであった。[35]

坪井は、一枚の地図上において複数の民族を比較対照できるようにし、各民族の特徴や相違点を来館者に示そうと考えていたのである。人形を取り付けていることから、理解を容易にする工夫がされていたことがわかる。

学術人類館は、坪井の思いに反し、批判の対象となった。清国や琉球からは、開館前から抗議が相次いで寄せられた。『大阪朝日新聞』や『琉球新報』等のメディアでも学術人類館を非難する文面が掲載され、「人類館事件」として取り上げられた。[36]人々は、学術人類館を学術上、商業上、工業上の参考となる施設として捉えていたのではなく、見世物小屋又はそれに相当する施設として認識していたのである。博覧会主催側も、学術人類館は「珍奇大に人を娯楽せしむるものあり」と報告しており、他の余興と同様、娯楽性を有する施設であると認識している。[37]

小結

人類学は、欧米においても日本においても植民地展示と密接に関係している学問であった。坪井は、一九〇〇年のパリ万国博覧会で目にした「人種の展示」を人類学研究上有益なものであると捉えていたが、学術人類館の例からもわかる通り、当時の日本人にとって「人種の展示」は見世物の域を脱していなかったのである。

このことから、坪井は、一般における人類学の認知度が未だ低いことを悟り、人類学の普及を目的とした人類学展覧会を自ら企画開催することとなるのである。

三、東京帝国大学人類学教室標本展覧会

㈠　開催の趣旨

東京帝国大学人類学教室標本展覧会は、一九〇四年六月三日から五日までの三日間、東京帝国大学人類学教室で行われた展覧会である。この展覧会は、展示のほとんどが坪井の案に則したものであり、坪井が自身の人類学の啓蒙を目的とする展示理論を実施したものであった。[38]展覧会の方針は、次の通りである。[39]

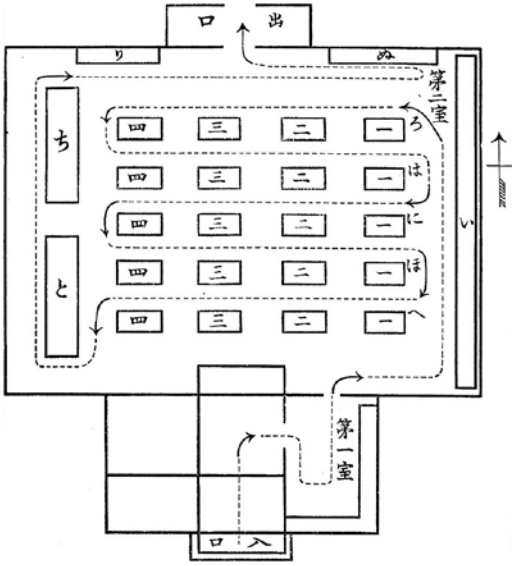
展覽會は大學内部の職員學生及び校外の人々の爲に開くので、期する所は人類學標本の眞價値を示すに在るので有りますから、標本其者を陳列すると同時に其價値有る所以を明にする設備をも工夫しなければ成りません。即ち人類學標本展覽會は人類學大意を示す場所たらざる可からずと申して宜しい。既に人類學大意を示すと云ふ以上は、專門を異にする人、初學の人、全く様子を知らぬ人、學問の性質を誤認して居る人に向かつても略ぼ要點を悟らせる様な仕組みを立てなければ成りません。

坪井は、一般への人類学普及のために知識の有無に拘らない、万民に理解が容易である展示を念頭に置いていたことがこの文面から読み取れる。

(二) 展示内容

展示室は、第一室と第二室に分かれていた。第一室では、人類学の概要説明に関する展示を行っている。具体的には、日本の人類学研究の淵源と現状を記した「人類學史摘要」を壁面に掲示しているほか、諸外国の人類学研究雑誌を展示している。国内のみならず、諸外国における人類学研究の現状に関しても

【表】
い…諸人種の部
ろ…横列　台湾蕃人の部
は…横列　マレイ土人の部
に…横列　南洋土人の部
ほ…横列　ニウギニイ土人の部
へ…横列　アイヌの部
一…縦列　写真
二…縦列　身体装飾及衣服
三…縦列　諸器具
四…縦列　利器
と…日本石器時代人民の部
ち…日本種族上代の部
り…韓国人の部
ぬ…清国苗族の部



坪井正五郎1904「人類學標本展覽會開催趣旨設計及び効果」『東京人類學會雜誌』第219號p.338

示そうと試みているのである。

第二室では、諸人種の現状、日本種族古代の状態、日本古代住民に関する展示が行われている。展示資料の内容と展示配置に関しては、「人類學標本展覽會開催趣旨設計及び効果」に掲載されている。[40]（表を参照）

まず、展示内容に関しては、マレイ土人、アイヌ、韓国人に注目したい。坪井は、日本民族に関して「吾々日本人は馬來種族の混り込みもありまするし、朝鮮の混り込みもありまするし、北の方のアイヌの混りもあります」と述べている。[41]坪井は、日本民族の基となった民族に関する展示を行い、日本民族の淵源を説明しようとしていたと考えられるのである。台湾、南洋、ニウギニイの展示に関しては、これらは地理的に近隣の民族であり、その比較を目的としていることが推測される。

展示配置に関しても、資料の比較対照に重点が置かれていることがわかる。坪井の示した導線に沿って展示品を見ていけば、民族ごとに資料を通覧していくことができ、同番号を縦に見ていけば、各地方民族の状態を資料ごとに比較することができるようになっているのである。

また、この展覧会には、「人類分類地圖」が展示されている。この地図は、各種族の写真や図書に種族名と番号を記入した札を添え、その番号が地図上にふられた番号と対応する仕組みとなっていた。これは、学術人類館へ貸与した「世界人種地圖」と同様の工夫を施したものである。

小結

坪井の企画した人類学教室標本展覧会は、人類学の普及を目的とし、学術的意図に基づいた展示方法が実施されたものであった。西野嘉章は、「この展覧会が内容の点ですでに時代遅れのものであることは言うまでもないが、しかし、学術理論的な整合性に徹底して拘り、かつまたそのことを展示に供された文字・図表資料や同時期の出版物を以て市井の人々に理解させようとする姿勢において、坪井の努力には瞠目すべきものがある」と評価している。[42]

東京帝国大学人類学教室標本展覧会は、三日間の開催期間で観覧者数五，二七一人を記録し、東京日日新聞や毎日新聞等でも、展覧会が好評を博した旨が掲載されている。[43]

坪井の弟子であった前田不二三は、この展覧会について次のように記している。[44]

而して第一室において人類學といふものは先斯の如きもので、其目的を達する爲めに集めた材料であると云ふ事を理

解した人は、物品の陳列場にはいつてからも大變に興味ふかく見ておつた様です。

坪井の展示は、坪井の意図を観覧者に伝達する役割を果たしていたのである。

四、坪井の博物館構想

すでに述べた通り、坪井は、遊学中に学校に通わず、特定の人物に師事することもせず、博物館に通う日々を送っていた。博物館は、坪井にとって重要な学びの場だったのである。坪井は、展示に関する論考を多く発表しているが、博物館に関する論考もいくつか発表している。その中の一つが、「戰後事業の一としての人類學的博物館設立」である。

この論考は、一九〇五年『戰後經營』に掲載された論文である。『戰後経營』は、日露戦争後の政治、経済、教育など様々な分野における国家経営に関する論文が収録されており、大隈重信を始め、各界の専門家が寄稿している。

坪井の論文は、博物館設立の必要性を訴えるものであった。坪井は、政治、教育、軍事等に関する機関が次々と整備されている日本において、唯一欠けているのが「時勢に適つた博物館」「博物館として立てられた博物館」であると述べている。[45] 他の文明国には、人類学的博物館もしくは人類学部門があるにも拘らず、日本にこれが欠けているのは甚だ遺憾であるとし、博物館と称することができる施設の条件、戦後事業として人類学的博物館設立を希望する理由を挙げている。

本章では、前章までで考察した坪井の人類学展示の目的をふまえた上で、「戰後事業の一としての人類學的博物館設立」に見られる坪井の博物館構想を明らかにしたい。

(一) 博物館の条件

坪井は、論文中で博物館と称することができる条件として三つのことを挙げている。[46]

(第一)標本の選擇と其配列とに意を用ゐ説明と相應じて、見る人をして親切なる師に就いて教科書を讀むが如き感有らしむる事。

(第二)餘分の標本を貯へ置き、篤志家をして自由に研究材料を手にせしむる事。

(第三)學術上歴史上或は價格上の貴重品を保存し置き、來觀者をして之を親視するを得せしむる事。

第一で、展示資料の選定、理解を容易にする展示を行うための資料配置を、第二で、研究者のための資料提供を、第三で、貴重資料の保存、来館者への展示提供を条件として挙げている。坪井の挙げたこれらの条件からは、知識の有無に拘らず、すべての人々を来館者の対象としていることがうかがえる。この条件の後に、「人智開發上斯の如き博物館の必要は論ずるまでも無い事」と続けていることからも、坪井が博物館を人々の知識発展の場として捉えていたことは明白である。[47]

㈡　人類学博物館の必要性

坪井は、人類学的博物館設立を希望する理由として六点を挙げている。少々長くなるが、次に引用する。[48]

（一）世界の日本と云ふ事は好く人の云ふ所で、今日の日本は實に世界を相手とし、世界が此の日本を相手として居ると云ふ事は、世人の自覺して居る所で有るが、此時勢に應じて相當の働きを爲やうとする者は、我が相手たる世界諸地方住民の事を知つて居らなければ成らぬ。其傍ら我が版圖内諸住民の事も明かにしなければ成らぬ。此爲には諸人種に關する物を集め置く必要が有る。

（二）他邦人に向つて我が國情の眞相を知らしめんには、彼我の事物を對照するに便利な方法に從つた陳列所をば作るのが肝腎で有る。内外諸人種の生活狀態を示す諸標本は斯かる場所に缺くべからざるもので有る。

（三）戰争の結果我々の知り度く思ふのは滿洲地方の事情で有るが、殊に住民に關する知識を得る事は最も望ましい所で有る。支那本部及び韓國の住民に付いても、世人に示す可き事は多々有る。諸外國人中にも是等地方諸種族の事を知り度がつて居る者が澤山有るに違ひ無い。即ち我が邦人の爲にも外國人の爲にも彼等に關する物品を集め置く事は極めて有益で有る。

（四）日本が東洋諸國人の開發を以て務めとする以上は、夫れ等の人々の爲に世界の有樣を示す設備を爲す事を忘れては成らぬ。我が国の然る可き地に諸人種に關する物品を置く所を作つて、來遊東洋諸國人をして容易に世界人類の事を知らしめると云ふが如きも、我々の當に爲すべき事と申して宜しい。

（五）我が國の地理上の位置は諸人種の物を集めるのに誠に都合が好く、北方には種々の北地住民が居り、西方には滿

洲、韓國、支那本部の住民が居り、南方にはアンナン人、シャム人、マレイ諸島、フィリピン群島の土人、尚ほ先きにはアメリカ諸地方諸種の住民が居る。船で自由に往來が出来るから此邊の物を集めるのは容易で有る。開明國の物は遠方からでも取り寄せられるが未開地の物は集まり難い。日本が太平洋に位置を占めて居ると云ふには物品蒐集の爲實に好都合で有る。アフリカには縁が遠いが其他の地方の物は勞が少くて集められる。

（六）日本人の人種的來歴を考へんには近傍種族の事を知らなければ成らぬ。日本人の人種的位置を考へんには世界人種の事を知らなければ成らぬ。而して日本人の自信を強くする爲には其來歴位置を明かにする必要が有るから、諸人種物品の蒐集陳列は精神上益する所が甚だ大で有る。

全体的な印象として、坪井の博物館設立意図は、国際社会を強く意識していることがわかる。第一章ですでに述べた通り、人類学は、諸外国との交際、戦争や植民地の拡大などが重要な事象として捉えられる学問である。坪井は、日本が諸外国を相手として活動していくためには、国内外の民族に関する知識、人類学が必要であると主張しているのである。

坪井は、同年に発表した別の論文でも「以前は日本人は日本だけの事を知つて居れば宜かつたけれども、是れから後は世界諸地方の人と交はりが盛んになるから廣く諸人種の風俗を知らなければならぬと云ふことを感ずる」と述べており、国際社会における人類学の必要性を強く訴えているのである。[49]

（二）では、「内外諸人種の生活状態を示す諸標本」を用いて「彼我の事物を對照するに便利な方法」で展示をする必要があると述べている。第三章で取り上げた東京帝国大学人類学教室標本展覧会の展示方法と同様のことを述べており、坪井がいかに資料の比較対照を重視していたかがうかがえる。

（三）は、当時の時代背景を特に反映している項であると言えるだろう。日露戦争直後であった日本の関心が、満州および韓国に向いていることが明記されている。また、「我が邦人の爲にも外國人の爲にも彼等に關する物品を集め置く事は極めて有益で有る」と述べており、博物館の設立は、日本人以外にも利益をもたらすものであるとしている。

（四）では、東洋諸国人を対象とした設備の必要性を述べている。坪井は、近代国家となった日本が東洋諸国を牽引していく義務があると考えており、東洋諸国人に「容易に世界人類の事を知らしめる」ことが成すべきことの一つであるとしている。

（五）では、地理的観点から人類学的博物館設立の便宜性を述べている。坪井は、「人類學研究所としての我國」と題する論文において次のように述べている。[50]

人類研究は多くの人種の比較や、古代人民の遺物の調査によつて進むので、斯ういふ総ての點に、都合好くなつて居る日本に産れ合せた者は、實に人類學研究上に取つて、幸であると云はなければなりませぬ

坪井は、日本の地理的状況にも触れた上で、日本が人類学的博物館の設立に最適な場所に位置していることを主張している。

（六）では、「日本人の自信を強くする」、つまり日本人のアイデンティティーの確立のために人類学的博物館が必要であると述べている。その理由は、坪井が何度も述べているように、坪井が国際社会を意識していたためである。国際社会の中で諸外国を相手とするためには、「日本人」という存在を確立させる必要があった。そのためには、他の民族との違い、日本人の特異性を示すことが重要であり、人類学的博物館がその役割を果たすための施設であるとしているのである。

小結

坪井は、文明国にとって人類学的博物館が必需の施設であると考えていた。その博物館は、研究者から一般にいたるまで、学術的利益を得ることができることが条件であるとしている。

設立を希望する理由としては、国際社会の中の日本を強調し、日本人に対して内外諸人種の知識を与えるための施設として博物館が必要であると述べている。また、欧米諸国、東洋諸国に向けた展示・設備も必要であるとしており、日本人以外も来館者の対象として捉えていた。

坪井は、人類学的博物館の設立時期について、「夫れには戦後が誠に好い時機で有ると思ふ。紀念として是程好いものは少なからうと信ずる。世人をして世界人類の觀念を得せしめるのに是程好いものは他に無からうと信ずる」と述べている。[51] 坪井は、国民意識と国外への関心が高まっている戦後こそ、人類学的博物館を設立する絶好の機会であると考えていたのである。

おわりに

坪井は、今まで以上に諸外国との交流が頻繁になっていく国際社会において、人々が人類学に対する知識を持ち、理解を深めることが必要であると主張している。人類学を一般に普及させるための手段として坪井が選んだのが、展示である。パリ万

国博覧会の「人種の展示」や第五回内国勧業博覧会の台湾館などを目にし、学術人類館での経験を経た上で実施した東京帝国大学人類学教室標本展覧会では、知識の有無に拘らず、全ての人に対して理解を容易にするための工夫と、資料の比較対照に重点を置いた展示方法が用いられていた。

坪井は、この展覧会の主旨と展示理念を以降も曲げることなく、「戦後事業の一としての人類學的博物館設立」の中でも同様の意見を主張している。坪井の人類学展示と博物館構想は、人類学の普及と発展を目的としつつ、その先には「日本人の確立」という大きな意図があった。国民一人一人に「日本人」である自覚を持たせることと、それを明確に、目に見える形で示すことは、当時の日本において必要とされていたのである。坪井の博物館構想は、まさに「時勢に適つた博物館」の提案だったのである。

註

（1）松田京子　二〇〇三『帝国の視線』吉川弘文館
（2）伊藤真実子　二〇〇九『明治日本と万国博覧会』吉川弘文館
（3）阿部純一郎　二〇一四『〈移動〉と〈比較〉の日本帝国史―統治技術としての観光・博覧会・フィールドワーク―』新曜社
（4）邉見端　一九八六「明治期〈博物館学〉の面目―坪井正五郎博士の業績―」『博物館学雑誌』第十一巻第二号、青木豊　二〇〇八「坪井正五郎博士の博物館学思想」『國學院大學博物館学紀要』第三十三輯など
（5）坪井正五郎　一八九四「人類學と近似諸學との區別」『東京人類學會雑誌』第一〇一號　四二六頁
（6）坪井正五郎　一八八六「研究項目」『人類學會報告』第二號　三七頁
（7）『古物学』とは、明治十年に発行されたもので、考古学の定義や本質について記されている。この本の刊行により、多くの人々に考古学の意味が知られるようになった。
（8）前掲、青木豊「坪井正五郎博士の博物館学思想」二三頁
（9）註5に同じ　四二一頁
（10）坪井正五郎　一八九五「人類學研究の準備」『東京人類學會雑誌』第一〇八號　二一四頁
（11）註10に同じ
（12）坪井正五郎　一九〇五「人類學的知識の要益々深し」『東京人類學會雑誌』第二三三號　四六三頁
（13）宮武公夫　二〇一〇『海を渡ったアイヌ―先住民展示と二つの博覧会―』岩波書店　七一頁
（14）註10に同じ　二二一頁
（15）坪井正五郎　一九〇四「戦争の人類學的観察」『東京人類學會雑誌』第二一七號　二五九頁
（16）坂野徹　二〇〇五『帝国日本と人類学者―一八八四―一九五二年』頸草書房
（17）山路勝彦　二〇〇八『近代日本の植民地博覧会』風響社　七頁
（18）坪井正五郎　一八八九「パリー通信」『東京人類學會雑誌』第四四號　二三～二五頁
（19）松田京子　二〇〇九「人間の〈展示〉と植民地表象」明治大学博物館・

南山大学人類学博物館編　二〇一三『博物館資料の再生―自明性への問いとコレクションの文化資源化―』岩田書院　一二二～一二三頁

(20) 吉見俊哉　一九九二『博覧会の政治学―まなざしの近代―』中公新書　一九二頁

(21) 「出品部類目録」農商務省編　一九〇五『聖路易萬国博覧會本邦賛同事務報告』第一編　一二七～一二八頁

(22) 坪井正五郎　一八八九「パリー通信」『東京人類學會雑誌』第四三號　五二四頁

(23) 註5に同じ　四二一頁

(24) 全日本博物館学会編　二〇一一『博物館学辞典』雄山閣　二六三頁

(25) 國雄行　二〇一〇『博覧会と明治の日本』吉川弘文館　九一～九二頁

(26) 明治九年九月九日付河瀬秀治宛大久保利通書簡には、第一回内国勧業博覧会の出品物について「若外国人之出品を許允候事ニ相成候得ハ第一初發より之目的を変し種々之故障を引起シ可申」とあり、外国からの出品を許可しないものとしたい旨が伝えられている。（国立歴史民俗博物館編　図録『大久保利通とその時代』七五頁）

(27) 註1に同じ　十六～十七頁

(28) 第五回内国勧業博覧会に関する情報は、大阪市商工課　一九〇四『第五回内國勸業博覽會報告書』、井上熊次郎編『第五回内國勸業博覽會案内記』考文社、『風俗画報』東陽堂を参考。

(29) 註2に同じ　一〇九頁

(30) 坪井正五郎　一九〇三「第五回内國勸業博覽會に於ける人類學」『東京人類學會雑誌』第二〇六號　二九九～三〇三頁

(31) 一九〇三『風俗画報』第二六九號、東陽堂　三五～三七頁

(32) 一九〇三「人類館趣意書」『東京人類學會雑誌』第二〇三號　二一〇九頁

(33) 坪井正五郎　一九〇三「人類館と人種地圖」『東洋學藝雑誌』第二〇巻第二五九號　一六六頁

(34) 松村瞭「大阪の人類館」『東京人類學會雑誌』第三〇六號　二八九～二九九頁

(35) 註33に同じ

(36) 「人類館事件」に関しては、真栄平房昭　一九九九「人類館事件―近代日本の民族問題と沖縄―」石井米雅・山内昌之編『日本人と多文化主義』国際文化交流推進協会、前掲「明治日本と万国博覧会」に詳しい。

(37) 第五回内國勸業博覽會要覽編纂所　一九〇三『第五回内國勸業博覽會要覽　上巻』一七一～一七二頁

(38) 前掲「坪井正五郎博士の博物館学思想」二九頁

(39) 坪井正五郎　一九〇四「人類學標本展覽會開催趣旨設計及び効果」『東京人類學會雑誌』第二一九號　三三四頁

(40) 註39に同じ　三三八頁

(41) 坪井正五郎　一九〇二―一九〇三「人類學研究所としての我國」『東京人類學會雑誌』第一九九號　三五頁

(42) 西野嘉章　一九九七「明治三七年の坪井正五郎―人類学教室標本展覧会をめぐって―」東京大学編『学問のアルケオロジー』四五八～四五九頁

(43) 坪井正五郎　一九〇四「人類學教室標本展覽會に關する諸評」『東京人類學會雑誌』第二一九號

(44) 前田不二三　一九〇四「學の展覽會か物の展覽會か」『東京人類學會雑誌』第二一九號　三四四頁

(45) 坪井正五郎　一九〇五「戰後事業の一としての人類學的博物館設立」山本利喜雄編『戰後經營』早稲田大学出版部　一八七頁

(46) 註45に同じ　一八八頁

(47) 註46に同じ

(48) 註45に同じ　一九一～一九三頁

(49) 註12に同じ　四六七頁
(50) 註41に同じ
(51) 註45に同じ　一九三頁